

# 神の計画



# 神の計画

神には計画がある！今日、あらゆる人間の計画が失敗に終わっているこの時代に、この確信こそが、人間の利己心と攻撃性によって安全、平和、幸福がほぼ完全に遮られているこの世界における唯一の光と希望の光線である。

この希望の光は、聖書から学ぶとき、未来への確かな保証となる。なぜなら、その成功は、神への信仰をまだ持つ少数派の善意や微力な努力に依存するのではなく、それを妨げようとする者たちの利己的な反対にもかかわらず、神がそれを実行に移す決意と能力に依存しているからだ。

多くの人々は、キリストの山上の垂訓で教えられた教えが世界に受け入れられれば、永続的な平和と幸福が達成できることに同意するだろう。しかし、問題は世界がこれらの教えを受け入れることだと彼らは言う。

人類の歴史は、利己的な人間が突然利他主義者となり、自己中心ではなく愛を行動原理として採用する決断を下す可能性は低いと教えている。武力によって諸国に黄金律の遵守を強制し、それによって人間の野心と貪欲がもたらす現在の混乱から、平和と幸福に満ちた新たな世界秩序が生まれるという希望は、実に薄弱である。

したがって、神の計画の中に人類の将来の幸福に対する真の希望を見いだすならば、その計画は効果的

に実行に移されるための十分な仕組みを含んでいなければならない。その成功は、利己的な人間の操作の可能性によっても、また不信の大衆の冷たい無関心によっても、危うくされてはならない。

聖書は、神の計画が「万国の望み」を世界に実現させるための実行可能性と最終的成功を保証する、神によって用意された方法と手段によって実行されると確約している。ハガイ書2:7、ゼカリヤ書4:6

## 神の御計画は決して失敗しない

現在の悲惨な世界情勢は、神の計画が一時的にでも失敗したことを意味しない。それは、人々が神の計画だと考えてきたものの失敗を意味する。この失敗は、聖書を再検討し、解釈の誤りを見出す必要性を私たちに強く認識させるべきである。その誤った解釈が、今や冷たい現実の事実によって打ち砕かれている希望と期待へと導いてきたのだ。

キリスト教の世界における目的と進展に関して、誤った根拠のない希望が抱かれてきたことは、現実から目を背けない者すべてにとって今や明らかである。

正統派の圏内で受け入れられてきた考えは、世界は着実に良くなりつつあり、文明は人間同士の善意がますます高まる段階へと進歩しており、やがて恐怖と貧困と戦争はなくなるというものだった。この正統派キリスト教の楽観的な展望には、おそらく現時代の存命中に、すべての異教徒がキリスト教に改宗する可能性も描かれていた。

## 神の計画

こうしたキリスト教世界の虚偽の希望と主張は、1914年の第一次世界大戦勃発とともに打ち砕かれ始めた。しかし平和維持という人間の努力が崩壊した結果から、文明と正義の勢力を結集させるための最大限の努力がなされた。この戦争は世界に突然訪れたが、哲学的には「戦争を終わらせる戦争」であり、世界を「民主主義にとって安全な場所」にするものだと言われた。

1918年の休戦協定後、「正常化」への回帰が盛んに語られたが、周知の通り正常化は決して達成されなかった。あらゆる会議と交渉が失敗した後、新たな血みどろの戦争が始まり、今や世界が正常に戻る望みはないと認識されている。今日の問題は、いかに正常に戻るかではなく、新たな「正常」がどのような性質を持つかである。

一方、こうした混乱の年月の間、地球上の人々がキリスト教世界の教会にますます多く導かれるどころか、その逆が真実であった。いわゆる文明国でさえ、教会会員数の増加は人口増加に追いついていない。

無神論は増加の一途をたどっている。世俗主義の精神は今なおほとんどの教会を支配している。若者たちは学校や大学から卒業する時、ほとんど全員が神と聖書への信仰を持たずに送り出されている。宣教活動は衰退し、あらゆる種類の哲学が我々の美しい国土に溢れかえっている。

我々がこれらの事実を振り返るのは、批判するためでも、誰かがもっと

良くすべきだったと示唆するためでもない。他者がより良い世界を作るために行ってきたことに批判を述べる時ではない。

ただ強調したいのは、人間の営みのどこかで、その誠実さの度合いに関わらず、男女が神の目的について誤りを犯したということだ。もし神がこの世代で世界を改心させたかったなら、それは改心していただろう。もし神の保護が1914年以前の地上の制度にかかっていたなら、それらは破壊されなかったはずだ。

預言者を通して主はこう言われる。「わたしの口から出る言葉は、むなしくわたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが遣わした目的を果たすのだ」（イザヤ55:8-

11）。これは、今日世界中に広がる悲惨な状況にもかかわらず、神の計画がどのようなものであれ、着実に成功裏に進んでいることを意味する。

使徒は「神は世界の初めから、ご自身のすべてのわざを知っておられる」と述べています（使徒15:18）。これは神が私たちの時代に向けたご計画をあらかじめ知っておられ、その計画に何ら誤りがないことを意味します。イザヤ46:9,10; 14:24,27

神に計画があることは、使徒パウロがエペソ人への手紙3:11で「世々の計画」について語ることで明らかに示されている。この計画の中心的な特徴は、私

## 神の計画

たちの主キリスト・イエスの贖いの業である。この計画が複数の時代を包含することは、エペソ人への手紙1:10でパウロが「時の満ちる時の管理において」なされることについて述べている点、またエペソ人への手紙2:7で「来るべき時代において、御自身の恵みの豊かな富を私たちに対して示そうとされた」と記されている点から示されている。使徒が神の定めの時が満ちた時に成し遂げられると概説する働きは、「キリストにあってすべてのものを一つに集める」ことであると述べられている。これは、人類の歴史において、キリストと調和した「すべてのもの」を目にすることを、それ以前のいかなる時代にも期待すべきではないことを意味する。

神の計画が様々な時代、すなわち期間を包含し、キリストを通して世界が神と和解するという計画が「時が満ちる」まで実現しないことを踏まえ、過去の時代における神の計画が「時が満ちる」という究極の目標に向かってどのように進展してきたかを聖書から探求しよう。

## 三つの世界

ペテロの第二の手紙第三章において、三つの「世界」について語られています。この預言において使徒は、物事の秩序を意味するギリシャ語「コスモス」を用いています。最初の世界は洪水の時に終わりを告げ、第二の世界はキリストの再臨と共に終わりを迎えます。そして第三の世界、すなわち神の世界は「終わりが無い」のです。

(エペソ3:21) この三つの世界は三つの長い時代を包含する。2ペテロ3:6；ガラテヤ1:4；ヘブル2:5

現代語の用法に合わせれば、これら三つの世界を「過去の世界」「現在の世界」「未来の世界」と呼ぶこともできる。聖書における「世界」という言葉は、私たちが用いるのと同様に、私たちが住む惑星を指すのではなく、人間社会における秩序、時には時代や期間を指すものである。

神の御計画に対する誤解の多くは、この事実を認識しないことから生じている。例えば、聖書における「世の終わり」は、文字通りの地球とその上のすべてのものが焼き尽くされることを意味すると誤解されてきた。この誤解が、多くの人々をこの主題の探究から遠ざけてきたのである。

この「世の終わり」の意味に関する誤解ゆえに、多くの人はその到来を恐れ、したがってそれを遙か未来に先送りしようとして努めてきた。

また他の人々は、それを単なる中世の迷信と見なし、真剣に考える価値すらないと考えてきた。しかし、聖書が語る「現世の終わり」が、まさに今我々の目の前で起こっていること、そして現代の思索的な人々が「一つの世界の終焉」と呼ぶものを指していることに気づけば、この主題は明日の世界がどうなるかに関心を持つすべての人にとって、重要な、いや、命に関わる意味を持つはずである。

聖書が「火」「地震」「嵐」といった表現を用いるのは、現代語で用いられるのと同じ比喩的な方法で

## 神の計画

、この世代の人々と国家に降りかかった壊滅的な災難を描写するためである。

主が「麦」と「毒麦」、「羊」と「山羊」を用いて、主に仕える者、仕えるふりをする者、主に敵対する者を例示するように、主は「地」と「天」という用語を用いて、「世界」と呼ばれる組織化された社会の段階を例示している。エレミヤ書22:29

ペテロは洪水以前の天と地について語り、それらが「かつてあった世界」、すなわち昨日の世界を構成していたことを示している。その世界は洪水の時に終焉を迎えたが、地球そのものは破壊されなかった。文字通りの地球については「永遠に存続する」と記されている。

（伝道者の書1:4）。イザヤ書45:18では、神が地をむなしく造られたのではなく「人が住むために形造られた」と告げられている。これは聖書を通して神の計画の概略を辿る際に心に留めるべき真理の基本的事実である。

神の計画は、人類を別の生命圏へ移すことではなく、人間が本来住むべき場所である地上に、永遠の命をもって回復させることにある。詩篇115:16、イザヤ書65:21、エレミヤ書31:17、申命記11:21、マタイによる福音書5:5

したがって、創造の時に始まった最初の世界は、洪水によって終焉を迎えた。使徒によれば、洪水後に始まった第二の世界は、大患難の最終段階、すなわち主（エホバ）の日にもたらされる破壊によって終

焉を迎える。このエホバの日は、主の再臨に続き、現在の邪悪な世界の状況がノアの時代のように変容する時である。 マタイ24:38,39; ルカ17:26,27; 創世記6:11; ペテロの手紙二3:6,7,10

ノアの時代、人々は「食べたり飲んだり、嫁いだり婿に出したり...そして知らなかった」と記されている。迫り来る洪水によって「当時の世界」が滅ぼされることを。

同様に聖書は、「主の日」が「夜中の盗人のように」来ると説明している。人々は、その日の破壊的な災いがこの「今の邪悪な世界」を覆すまで、出来事の重大さに気づかないのである。ガラテヤ人への手紙1:4 ; テサロニケ人への第一の手紙5:2 ; ルカによる福音書21:35

しかし、今日の世界の終わりは人類の終わりを意味しない。いや、神に感謝せよ、それは新たな世界、すなわち明日の世界—神の明日の世界—の始まりを意味するのだ。昨日と今日の世界の主な特徴の一つは、それらが利己主義に基づいており、神の宿敵であるサタンがその支配者であったことである。

しかし、今日の世界の終わりという世界の始まりと共に、サタンは縛られ、その新しい世界は新たな、神聖な支配下に入る。黙示録20:1-4; 21:1-5; ペテロの手紙二3:13; イザヤ書65:17; オバデヤ書21

## 神の計画

### 利己主義 対 愛

サタンの支配下において、利己主義、自己利益の精神は、昨日の世界の始まりにおいて支配的となった。罪と利己主義は最初の世界を支配し続け、その結果、その終わり間際、地は「暴力が満ちた」のである。

（創世記6:11）。今日の世界も同様である。実際、私たちはすでに現世の崩壊を目の当たりにしており、その破壊は預言者たちが予告した大患難の時代の暴力がもたらしている。ダニエル12:1

神の明日なる世界は、新たな統治者であるキリスト、すなわち王の王、主の主の指導のもとにある。（詩篇72:1-20;

黙示録19:16）その統治は利己心ではなく愛に基づく。これこそ使徒が

その世界を「義が住む」世界と呼ぶ所以である。（ペテロの手紙二3:13）

罪と利己主義によるサタンの誤った支配は死をもたらした。なぜなら「罪の報酬は死」だからである（ローマ6:23）。メシアの義と愛による統治は命をもたらす。なぜなら、すべての敵が彼の足の下に置かれるまで、彼は統治し続けなければならないからであり、滅ぼされる「最後の敵」は「死」だからである（コリント第一15:25,26）。

この三つの世界とその異なる特性を常に心に留めておけば、聖書がそれらについて述べることは、それぞれの時代に属する様々な記述を適用しない限り矛

盾しているように見えることが容易に理解できる。例えば、預言者は現在の時代についてこう述べている。「今、私たちは高ぶる者を幸いと呼び、悪を行う者は高く上げられ、神を試みる者さえも救われる」

しかし来たるべき世界については「正しい者は栄え」また「神はすべての悪しき者を滅ぼされる」と記されている（マラキ3:15、詩篇72:7、使徒3:23、詩篇145:20）。

聖書の摂理を研究するこの方法は、使徒パウロがテモテに「真理の言葉を正しく分ける」ことに励むよう勧めた際に言及しているものの一部と思われる（テモテへの手紙二 2:15）。

聖書研究において、様々な預言や約束をそれらが属する世界や時代に適用しようと努めるならば、その教えの中にこれまで気づかなかった単純さ、調和、美しさを見出すだろう。聖書そのものは調和しており、それを理解するために残されたことは、私たちがそれとの 調和を得るだけである。ヨハネ7:17; ルカ11:9,10; エレミヤ29:13

使徒ペテロが言及した最初の二つの「世界」（ペテロ第二3:6,7）は「この世の支配者」（ヨハネ14:30）であるサタンの支配下にあり、人間の事柄における完全な神の統治は明日の神の世界に留保されている。しかしこれは、神がこれまで人類に関心を示してこなかったことを意味しない。

むしろ、神は時代を通じて計画の準備段階を着実に

## 神の計画

進め、やがて統治の主導権を握り、「時の満ちる」という定められた時に「地上のすべての家族」を祝福する備えを整えてこられたのである。創世記12:3; エペソ人への手紙1:10

サタンが民衆を支配してきた時代において、神が行ってこられた御業は、段階的な時代、すなわち時代を通じて発展してまいりました。

神の言葉—すなわち民への約束と指示—は、これら様々な時代を通じて地上で神の業が成し遂げられることに大きく寄与し、神はそれぞれの恵みの時代ごとに特別な働きを持たれた。聖書には、最初の世界、すなわち昨日の世界において、神が民と関わる方法に重要な変更がなされたことを示すものは何もない。

その時代には重要な約束が与えられました。創世記3章15節では、女の子孫がいつか蛇の頭を「打ち砕く」と告げられています。エノクを通して神は、主が御自身の聖徒の無数と共に来られると約束されました。

(ユダ14)。ノアとの関わりにおいては、現在の世界の終焉に関連して今日でも非常に価値あるいくつかの例示が与えられました

。しかし、神の計画がかなりの明確さをもって明らかになり始めるのは洪水の後であり、とはいえ、私たちが今見る神の計画の光に照らせば、洪水以前の出来事は非常に意味深いものです。

## 族長時代

洪水後の最初の時代は「族長時代」と呼ぶことができる。この表現が聖書に明記されているからではなく、この期間に神がヤコブの死と彼の十二人の息子たちによるイスラエル国家の建国まで、いわゆる族長たち、すなわちイスラエルの父たちと呼ばれるごく少数の個人とだけ関わったことを聖書が明らかに示しているからだ。

父祖の時代における神の働きや計画は、人々の福音化ではありませんでした。神はアブラハムに語りかけ、彼に驚くべき約束を与えました。

実際、神は「地のすべての家族を祝福する」というご自身の目的を彼に告げられた。これは神が全人類に関心を持っておられることを示しているが、当時の人々一般には約束された祝福を受ける機会は与えられていなかった。イザヤ書51章2節では、神がアブラハムだけを召し出されたと記されている。創世記12章1節

ソドムとゴモラの町々がその悪のために滅ぼされたのも、この祖先時代のことでした。しかし神は、これらの悪しき人々を悔い改めさせようとはされませんでした。

このことは新約聖書におけるイエスの言葉から明らかである。当時の特定の都市で力強い働きをなされた主は、もしソドムとゴモラで同じ力ある業がなされていたなら、それらの都市は滅ぼされなかつたらうと語られた。なぜなら彼らは悔

## 神の計画

い改めたであろうからである。

明らかに、もしそれが神の計画であったなら、神はそれらの邪悪な都市の人々に効果的な証しを与えることができたはずである。しかし神はそうしなかった。むしろ、悔い改める機会を与えることなく彼らを滅ぼされた。またイエスは、御自身とその力ある御業を認めようとしなかった選ばれた都市たちよりも、彼らには「より寛容な」時が与えられると約束された。

一方で、これらの人々もまた、神がアブラハムの子孫を通して「地のすべての家族」を祝福するという約束に含まれていたと結論づけざるを得ない。したがって、この状況について私たちが採り得る唯一の調和的な見解は、神がソドムの人々を死からよみがえらせて祝福する計画を立てているというものである。

これはまさに預言者エゼキエルが、預言の第16章44節から章の終わりにかけて予言していることである。

## 約束の種

父祖の時代に神がアブラハムに与えた約束は、後に神の誓いによって確認された（創世記22:16-18、ヘブル人への手紙6:13-18）。

これは驚くべき約束であり、神が地のすべての家族を祝福するご計画を明らかにしたものである。この約束はイサクとヤコブに確認され、ヤコブの死の際にはイスラエル民族の核となる十二人の息子たちに

確認された。アブラハムはこの約束の完全な意義を理解していなかった。例えば、祝福の種が霊的な種であることを認識していなかった（）。

またアブラハムは、神が彼と結んだ契約が二つの部分から成ることも明確に理解していなかった。一つは「子孫」の発展を規定する部分、もう一つはその子孫を通して約束された祝福を授ける部分である。アブラハムは疑いなく、奇跡の子イサクこそが約束の子であると考えた。そして神の約束を成就させる力に対する彼の信仰は深く、たとえ神が命じられた通りイサクを犠牲として捧げても、神が彼を死から甦らせると信じていた。ヘブル人への手紙11:17-19

ヘブル11:13,39と使徒7:5で、使徒はアブラハムが約束が成就される前に死んだと述べている。しかし彼は生きている間、「神が設計者であり建設者である、基礎のある都を待ち望んでいた」のである。

（ヘブル11:10）。アブラハムにとって「都」とは政府、すなわち王国の中心を意味した。ゆえに彼が神に期待したのは、アブラハムの子孫が重要な地位を占める王国を地上に築くことだった。アブラハムへの約束は、まさに旧約聖書における来るべきメシアの王国に関する約束の一つであった。

アブラハムは、当時の他の先祖たちと同様に、メシアの王国の地上的段階において非常に重要な役割を担うことになる。そして神が彼らに与えた約束と、彼らとその約束に対して示した従順な信仰は、彼らとその役割に備える上で大きく関わっていた。

## 神の計画

これに加えて、神が先祖たちに与えた約束と彼らとの関わりは、後の時代の民に対する神の計画がより明確に展開される上で、極めて重要な役割を果たしている。このように見ると、神は先祖の時代において世界を改宗させようとはしなかったが、それでも神の計画に関連して非常に重要な働きを成し遂げたことがわかる。その時代における神の働きは、常にそうであったように、大いなる成功であった。

## ユダヤ時代

神の計画における次の段階であるユダヤ時代は、ヤコブの死で始まり、イエスの初臨で終わった。

「ユダヤ時代」という名称がこの時期に用いられるのは、神が御自身の王国の最終的な確立とそれに伴う万民への祝福に向けた準備作業を継続された方法を示唆するからである。この時代、神はユダヤ民族という一つの民族のみと関わり、他のいかなる民族とも関わりを持たなかった。預言者を通して神は彼らに宣言された。「地のすべての家族のうち、わたしが知ったのはあなたたちだけである。」（アモス書3:2）

神はイスラエルに律法を与え、預言者を遣わされた。祭司職を通して幕屋の奉仕を定められ、新約聖書によれば、それは「来るべき良いもの」の前兆であった。（ヘブル9:11,23;

10:1）神がこの民に約束されたのは、彼らが神に忠実であれば、彼らを「祭司の王国、聖なる国民」とするということでした（出エジプト19:5,6）。これ

は、彼らを通して神が約束された祝福を地のすべての家族に与えるという意味でした。

しかしイスラエルは、神の計画におけるこの高貴で栄誉ある地位にふさわしくなかった（ローマ11:7）。

。彼らの

なるメシアが来られた時、彼らは彼を拒絶した。その結果、神の特別な恵みの立場から切り捨てられた。しかしユダヤ時代における神の働きは失敗ではなかった。パウロは律法がユダヤ人をキリストへと導く「教師」の役割を果たしたと述べている（ガラテヤ3:24）。

ユダヤ人が神の完全な律法を守り、それによって命を得ることに失敗したことは、キリストの贖いの業の必要性を証明した。すべての国々も最終的には同じ偉大な教訓、すなわち贖い主の必要性を学ぶことになる。

ユダヤ時代において神は他の重要な事柄も成し遂げられた。イスラエルとの関わり、彼らの成功と失敗は、この時代の霊的イスラエルにとって貴重な模範と指針となる。

預言者たちを通してイスラエルに与えられた数百もの約束は、神の計画の重要な特徴の概略を構成し、それゆえ、メシアの王国において主と共に相続人となる準備をする主の従者たちを導く役割を果たす。また他の点においても、ユダヤ時代の神の働きは、人間の回復に関する神の計画において重要な位置を

## 神の計画

占めている。ユダヤ時代における神の働きは失敗ではなく、神が意図された目的を達成したのである。

ユダヤ時代はイエスの初臨をもって終焉を迎えた。その宣教期間及びその後三年半にわたり、神の恵みはユダヤ人に向けられ続けた。この取り決めに従い、イエスは自身の復活後まで、自らの宣教活動と弟子たちの宣教活動をイスラエル民族に限定した。イエスは弟子たちにこう言われた。「異邦人の道へは行くな。サマリヤ人の町へも入ってはいけない。むしろ、イスラエルの家の中の失われた羊のところへ行きなさい。」マタイによる福音書10章5-6節

## 福音時代

イエスの復活後、弟子たちにすべての国々へ宣教を広げるよう命じられたが、それでもエルサレムから始めるよう指示された。(ルカ24:45-49; マタイ28:19,20)

ダニエルが与えた預言(ダニエル9:24-27)によれば、メシアが「一週の半ばで断たれる」と記されており、イエスの死後、イスラエルに三と半年の恵みが示されることになっていた。ゆえに「エルサレムから始めよ」との命令があったのである。預言における「一週」は、一日を一年として七年間を表す。

民数記14:33,34; エゼキエル4:6; ダニエル12:11,12; 黙示録11:2,3

こうして「エルサレムから始まる」福音時代の働きが始まった。この時代はキリストの再臨、すなわち神の世界の明日の始まりまで続く。

「福音時代」という用語が、キリストの初臨と再臨の間のこの期間を指すために選ばれたのは、聖書がこの期間における神の働きが、王国の福音、すなわち「良き知らせ」の宣教によって成し遂げられることを示しているからである。

既に述べたように、族長時代には神は特定の族長たちを選び、彼らを通して御業を進められた。ユダヤ時代には、

ユダヤ民族全体を通して御業が成し遂げられた。

しかし福音時代において、神はその恵みを、父祖時代のように特定の傑出した個人に限定することも、ユダヤ時代のように単一の国に限定することもせず、御自身の民であるすべての人々に、すべての国々において王国の良き知らせを宣べ伝えるよう委ねられた。そしてそのメッセージに応答した者たちこそが、神が御自身の永遠の計画に参加するよう招くことによって、その恵みを授けられた者たちである。

では福音時代における神の働きの目的は何であったのか。この問いは使徒行伝15:13-

18で答えられている。ここには神が異邦人を訪れ「御名の民をそこから取り出すため」と記されている。ユダヤ民族全体がこの民となるはずだったが、その一部はキリストを受け入れ、受け入れた者には「神の子となる力を与えられた」と記されている（

## 神の計画

ヨハネ1:12)。しかし神の計画において、この「御名の民」は14万4千人から成るはずであった。ある観点からは相当な数ではあるが、人類全体、あるいは名ばかりのクリスチャンと比べれば、まさに「小さな群れ」に過ぎない。ルカ12:32

ローマ人への手紙11章17-

24節において、使徒は異邦人がこの福音時代の特権に入ることができるのは、ユダヤ人が「生まれつきの枝」として、彼らの不信仰のために切り落とされたためだと説明している。

これは、異邦人の中から選ばれた「御名の民」が、本来のイスラエル計画においてユダヤ人という「切り捨てられた者」の地位を実際に引き継ぐことを意味する。すなわち、肉的なイスラエルの家は、この特別な恵みの地位を失うのである。これが、黙示録7:4-8および14:1-

3において、14万4千人の集団全体がイスラエルの図像の下で表されている理由である。

特に注目すべきは、ここで「小群」と呼ばれる者たちがシオンの山で「小羊」と共にいとされ、その額に小羊の父の名が記されている点である。こうして彼らは「御名の民」、すなわち御名を帯びる者たちとして示されている。

黙示録19:7では、この同じ集団が小羊の「妻」となる姿が描かれており、この点においても彼らは天の父の家族名に与るのである（黙示録21:2、22:17も参照）。

## 神の統治の家

神の言葉の全体的な証言に照らせば、福音によって諸国民の中から集められたこの「御名の民」こそが、神の統治の家である。ミカ書4:1-

4では、全地にわたる神の王国の確立が語られており、この王国（預言において「山」として象徴化されている）は「主の家」によって構成されていることが示されている。

この現世の邪悪な世界のすべての世襲統治の家系は、家族制度を通じて、支配者たちが代々「支配する権利」を継承してきたものである。

それゆえ神は、御自身の王国もまた家系的な取り決めである統治の家によって支配されると告げられる。この家族の成員は、相続によって、また家族の一員であることによって統治の権利を受ける。しかしそれは地上の家族ではなく、神聖な家族である。それは神ご自身の家族である。

その頂点に立つのは、神の「独り子」であり愛する御子、キリスト・イエスである。イエスに加え、その足跡をたどる者たちも神聖な家族に迎え入れられ、神の子となる。コロサイ人への手紙 1:18; ヨハネによる福音書 1:12; ヨハネの手紙一 3:1,2

使徒はさらに、もし私たちが子であるならば、「神の相続人であり、キリストと共に相続人である」と説明している。

（ローマ8:16,17）。これらの共同相続者全員に、神の統治の家に居場所が約束されており、この福音時

## 神の計画

代の目的そのものは、天のこの王家の成員として、キリストと共に千年間生き、支配する者たちの選抜と準備にある。黙示録20:4；詩篇2:9；黙示録2:26,27；コリント第一6:2,3

福音の時代の働きが完了すれば、神の新しい明日なる世界の確立を妨げるものは何もない。今日の世界の終わりに近づき、キリストの再臨が（世界にとっては）「夜中の盗人のように」まず起こる。キリストはまず、その花嫁を迎えに来られる。

（ヨハネ14:3；黙示録19:7；21:2）。彼の花嫁、すなわち教会が天の栄光の中で彼と一つになるとき、黙示録22:17の約束が成就する。そこには「御霊と花嫁が言う、『来なさい...いのちの水をただで受けなさい』」と記されている。

## 新世界における第一の時代

新世界の最初の千年間は、千年期、あるいはメシア時代と呼ぶことができる。この千年の間に、福音時代において世界から集められた教会は、イエスと共に統治し、神の約束された祝福を「地上のすべての家族」に分配する目的を果たす。

（創世記12:1-3；ガラテヤ3:16,27-29；黙示録5:10；マタイ19:28）。神の偉大な計画が栄光に満ちた勝利の結末を迎えるのは、まさにこのメシアの時代においてである。エペソ1:10

しかし千年王国時代が到来する前に、世界は「国が生まれて以来、かつてないほどの苦難の時」を経な

ければならない（ダニエル書12:1）。私たちが今まさにこの時代に生きており、現在の世界の苦難がこの時代を終わらせる「苦難の時」の一部であると信じるに足る根拠は十分にある。

教会の人々は概して、神がこの福音の時代に世界が改心することを意図されたと想定してきたため、現在の文明の崩壊は彼らを当惑させ、神とキリスト教への信仰を損なう傾向にある（エレミヤ8:15）。しかし、この時代の働きが単に、次の時代にキリストと共に支配する者たちを世界から集めることに過ぎなかったと理解すれば、キリスト教の現在の明らかな失敗は理解できる。

実際、イエスご自身が、再臨の時があれば地上に信仰はほとんど残っていないと強く示唆しておられた（ルカ18:8）。パウロは「終わりの時」に危険な時代が訪れ、人々が「神を愛するよりも快樂を愛する者」となると預言している（テモテへの第二の手紙3:4）。

（テモテへの第二の手紙3:4）。麦と毒麦のたとえにおいて、イエスは公言する信徒の大半が単なる偽りのクリスチャンであり、時代の終わりにこれらの宗派の束が滅ぼされることを明らかにした。

この世の終わりにおける毒麦の焼き払いは、この時代が終焉を迎える大患難の一部を構成する。しかしこれは、この時代の働きが失敗だったことを意味しない。

## 神の計画

この時代における神の御業は、過去のあらゆる時代と同様に、驚くべき成功を収めてきた。すべての真の「麦」は最終的に天の倉に集められ、やがて「父の御国で太陽のように輝く」のである。

（マタイ13:43）。したがって、キリスト教を名乗るものが崩壊していく様子をどれほど目撃しようとも、神の許しなくして何事も起こり得ないこと、そして我々にとって災難に見えるものも、千年の王国統治における真のキリスト教確立のための準備に過ぎないことを心に留めよう。

## エデンの楽園

ここで神の計画の発展を、少し異なる視点から辿ってみよう。神の摂理における時間的要素の重要性—神の計画が時代ごとに如何に展開してきたか—を考察してきたが、今度は存在の異なる次元、すなわち生命の領域ごとに神の計画が如何に関わっているかを検証する。

エペソ人への手紙1章10節で、使徒が「時の満ちる」という神の計画の完成を語る時、彼はその時、天にあるものも地にあるものも、すべてがキリストのもとに集められると宣言している（）。

聖書には二つの救いが記されている。一つは天の救い、もう一つは地の救いだ。この事実を考慮せずに聖書を学ぶと、多くの矛盾が生じているように見える。

旧約聖書の約束の大半と新約聖書の一部の約束は地上の祝福を描写している一方、新約聖書の約束の大

半と教会について預言的に語る旧約聖書の約束は天の希望を概説している。これらの約束の間に存在する調和を見るためには、適切な時期に応じた適用を行う必要がある。

私たちは、アダムが地上に生きるために創造され、地が人の住まいとして造られたことを強調する（イザヤ45:18、詩篇115:16）。

アダムに天に行くことについて語られたことは何もありません。神に背けば死ぬと告げられました。逆もまた真であったでしょう—背かなければ死ななかつたのです。もしアダムが神の律法に背かなければ、「地を満たし、それを治めよ」という命令は、罪や病や死なしに実行されていたでしょう。

この場合、アダムとその子孫は死の恐怖なく地上に生き続けたらう。地を満たせとの命令が完全に果たされた時、人類のこの機能は摂理的に終焉を迎え、地は完全で幸福な人類家族で満たされたまま、永遠の歳月を通じて神の完全なる恵みを享受し続けたらう。

しかし、アダムが神の律法に背いたため、予言された死の宣告が彼に下り、事態はこのようにはならなかつた。だがこれは、神が人間を創造した目的が失敗したことを意味しない。

アダムの背きによって、全人類は完全と生命の代わりに、罪と死の状態に生まれ出たのである。パウロはこう説明している。「一人の人の不従順によって罪が世界に入り、罪によって死が来た。こうして死

## 神の計画

はすべての人に及んだ。なぜなら、すべての人は罪を犯したからである」（ローマ5:12,19）。

アダムの墮落は、彼が罪を犯したその瞬間に死の宣告をもたらし、彼はこの状態のまま子孫を産んだ。ゆえに彼らもまた死の道に置かれた。流れはその源を超えることはできないからである。

## 相応の代価

アダムが罪を犯した時、死後の天国や地獄について何も告げられなかったことを思い起こそう。彼に告げられたのは「死なねばならない」ということだけであり、これは単にエデンの園という完全な楽園、すなわち地上の楽園で生き、楽しむ特権を失ったことを意味した。アダムの罪はこうして楽園の喪失をもたらしたのである。

したがって、神の救いの計画は必然的に楽園回復を目的とするものである。では、それはどのように達成されるのか？聖書は、キリストの贖いの業によって達成されると答えている。

贖いの業に関連して用いられる聖書用語の一つが「身代金」である。パウロは

「人」キリスト・イエスがすべての人のために自らを「身代金」として捧げたと述べている（テモテへの手紙一

2:5,6）。この箇所では「身代金」と訳されるギリシャ語は「アンティルトロン」であり、「相応の代価」を意味する。

カルバリの十字架で贖い主として死んだイエスとい

う人間は、罪を犯した完全な人間アダムに対する完全に対応する代価であった。イエスについて「肉となった」と記され、その目的は「死の苦しみを味わうため...神の恵みによって、すべての人のために死を味わうため」であった（ヨハネ1:14、ヘブル2:9）。

イエスの初臨が実現した時、彼がその時に遂行した計画の主たる特徴は、全世界の罪のために自らの命を捧げることでした。洗礼者ヨハネはイエスについてこう言いました。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」（ヨハネ1:29）

もし神の計画に追加的な準備段階が存在しなかったならば、イエスの死と復活に続く神の御業は、墮落した人間を失われた状態—すなわち楽園—に回復させることだったのであろう。その場合、信者へのメッセージは「さあ、...いのちの水をただで受けなさい」となっていたはずである。

（黙示録22:17）。イエスを通して、アダムに下り、彼を通して全人類に及んだ死の宣告を取り消す備えがなされていた。したがって、次に論理的に思われる段階は、回復の業を開始することだった。

しかし、ペンテコステで使徒たちが始めたのはこの業ではなかった。確かにイエスは当時の病人の数人を癒し、死者の数人をよみがえらせたが、これは単に将来の御業を示すためであった（ヨハネ2:11）。使徒パウロは、初期教会に与えられ限られた奇跡が行われた聖霊の賜物は「止む」、すなわち

## 神の計画

過ぎ去るべきものだと説明している。

（コリント人への第一の手紙12:31; 13:1-3,8; 14:18-20,22）。その後、キリストの名において奇跡を行う能力を主張する者も現れたが、死者は甦らず、奇跡的に癒やされたと主張する病人はごくわずかで、その主張の信憑性にも疑問が残る。

イエスの弟子たちは、地上で健康と永遠の命を約束されたわけではない。むしろ、真のキリストの弟子となることを望むなら、彼と共に苦しみ、死ぬことを覚悟すべきだと告げられた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を負い、わたしについて来なさい」と、主は弟子となる条件を学びたい者たちにこう宣言された。マタイ16:24

聖書が明らかにするように、もしイエスが罪人の代わりに死んだのなら、彼を信じる者は死ぬ必要がないと考えるのは自然だろう。それは神の明日の世界では真実となるが、この福音時代においては、神の救いの計画の別の段階が展開されており、それは最も重要なものである。

その計画の段階とは何か。それはキリストの教会への招きと選びであり、その成員をメシアの時代に人類に命を与える働きに主と共に参与させるための備えである。使徒はこれを「天からの召し」と表現している。

（ヘブル3:1、ピリピ3:14）。イエスも、裕福な青年指導者への言葉の中でこれに言及し、もし彼に従っ

て死に至るなら「天に宝を持つ」と告げられた。ルカ18:18-22

## 備えられた場所

イエスはまた、ご自身の足跡をたどる弟子たちへの約束の中で、天の希望について言及されました。「わたしがあなたがたのために場所を用意しに行く。そして、わたしが行くなら...再び来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。それは、わたしがいるところに、あなたがたもいるためである。」

(ヨハネ14:2,3)。ペテロは教会の天の希望について「これによって、私たちに、神聖な性質にあずかる者となるための、非常に大きく尊い約束が与えられているのです」と述べています。ペテロの手紙二1:4

パウロはクリスチャンに「上のもの」に心を向けるよう勧めています。この「上のもの」とは、彼が言うには「キリストが神の右の座に着いておられる場所」です。

(コロサイ3:1,2)。これは教会の報いがイエスの報いと同じであることを示している。使徒はまたこう言ってこれを強調している。「もし私たちが彼の死の似姿に植えられたなら、彼の復活の似姿にもあるであろう。」ローマ6:5

この後者の箇所には、この時代のイエスの従順者たちが永遠の人間的な命を回復されない理由が説明されている。それは彼らがイエスと共に死ぬよう招か

## 神の計画

れているからである。

言い換えれば、神の計画における犠牲の業はカルバリで完結したのではない。パウロはローマ12:1でこれを明示している。「

神のあわれみによって、兄弟たちよ、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる聖なる、生ける供え物としてささげなさい。これが、あなたがたの合理的な礼拝です。」

コロサイ人への手紙1:24でパウロは「キリストの苦しみにあずかる」と語っている。他の箇所では、教会が神の御心を行うために命を捧げる犠牲の役割を担うと示されている。使徒が「キリストの死の似姿に共に植えられた」と語るこのキリスト者の犠牲的働きこそが、その本質である。

イエスは罪人として、罪の宣告を受けて死んだのではない。進んで罪のための捧げ物として、犠牲的に死んだのである。その死によって、アダムの罪、そしてアダムを通して全人類に受け継がれた罪が、法的に取り消されたのである。

## キリストによる義認

では、イエスの従者たちはどうしてイエスと同じ死に方をするのか、と問う者もいるだろう。彼らもまた墮落した人類の一員であり、全人類と同様に死の宣告を受けているのではないのか。確かに彼らはそうであった。しかし聖書は、イエスの復活後、彼が私たちのために神の御前に現れたと告げている。

(ヘブル9:24)。これは、彼の犠牲の功績が、彼に

奉献されたすべての信徒を裁きから解放し、彼らの死がもはや神によって裁きの死ではなく、犠牲の死として見なされることを意味する。

ローマ人への手紙6:10,11でパウロは、クリスチャンが自らを「罪に対して確かに死んだ者と見なす」ことができるかと告げている。それはイエスが「罪に対して死んだ」、すなわち罪のいけにえとして死んだのと同じである。これは、人類の贖いを提供するために教会の犠牲的な働きが必要だという意味ではない。それはすべてイエスによって成し遂げられた。

その真意は、神が教会の捧げる犠牲を完全な人間の捧げ物として受け入れ、これらの犠牲を通して教会がメシアの時代にイエスと共に働き、全人類への命の分配者として備えられるということである。

キリストの真の教会を構成する者たち—その名は「天に記されている」者たちは、この世から召され、キリストの血によって彼らの不完全な行いが神に受け入れられることを確約されている。地上の命を犠牲にする意志に基づいて、彼らは天の報いを約束されている。こうして彼らは、栄光と誉れと不死へと至る犠牲の狭い道を歩むのである。マタイ10:39; ローマ2:7

不死の希望が与えられるのは教会のみである。アダムは不死ではなかった。不死とは死に打ち勝つことを意味するからだ。メシアの時代の終わりに完全さに回復される時、人は不死ではない。しかしこの福

## 神の計画

音の時代のすべての真の忠実なクリスチャンは、ついに不死へと高められる。

彼らは今イエスがそうであるように、高められた天の存在として造り変えられ、御姿のままの御子を見、御国において御子と共にあり、千年の間御子と共に支配するであろう。ヨハネの手紙第一 3:2; 黙示録 2:26,27; 5:10; 20:4,6

## 回復された楽園

この福音時代の働きが完了し、すべての真のクリスチャンが天の段階の王国においてイエスと一つに結ばれる時、人類を地上に生かす回復の働きが始まる。

使徒ペテロはこのメシアの時代の働きを「回復」の業と呼び、世界の初めから神の聖なる預言者たちの口を通して語られてきたと述べている。

（使徒言行録3:20,21）聖なる預言者たちのこれらの証言こそが、キリストの再臨後に人類にもたらされる地上の命の祝福を描写している。これらの地上の約束の成就是、この福音時代の教会が完成し、キリストのもとに天の領域—イエスが彼らのために備えた場所—に集められるまで待たねばならない。ヨハネ 14:1-3

この福音時代の働きが完了すると、次に、霊的な次元ではなく地上の次元において、人類全体をキリストのもとに集める働きが続く。こうして、キリストのもとに「天にあるものも地にあるものも、すべて

が一つにまとめられる」のである。

(エペソ1:10)。福音時代の初めに始まった教会の集めは、メシア時代が始まる直前に完成し、教会全体が栄光のうちにキリストと一つにされる。ゆえに「時の満ちる」この「時代」において、天における集めと地における集めが共にキリストのもとで成し遂げられると告げられている。

## 地上の君たち

最初に地上の完全さと命に回復されるのは、過去の忠実な僕たちである。彼らはイスラエルの父たちであったが、キリストの子らとなり、「全地の君たち」とされるであろう。

(詩篇45:16)。イエスは、アブラハム、イサク、ヤコブ、そしてすべての預言者たちが、その王国時代において民の教師として仰がれると語った(マタイ8:11; ルカ13:28-30)。彼らは神なるキリストの地上における代表者となり、その新王国の律法を執行する任務を委ねられる。

神のキリストのこの地上の代表者たちは、奇跡を行う力によって支えられるため、その時に課される律法—すなわちキリストの律法—を回避する機会は一切ない。その時「その預言者の言うことを聞かない(従わない)者は、民の中から滅ぼされる」と告げられている(使徒 3:23)。メシアの王国の律法に従う者は死ぬ必要はない。彼らは父アダムが失った完全さに回復され、その地上

## 神の計画

の完全さを基盤として、永遠に地上に生きる機会を得る。これが使徒ペテロが用いた「回復」という言葉、そして主が用いた「再生」という言葉の意味である。マタイ19:28

まもなく世界に訪れる回復の祝福に関する数百もの聖書の約束は、それが人々の幸福をもたらし、彼らの問題を解決する多くの方法の概要を示している。神の知識が海が水を覆うように全地を満たすと告げられている（イザヤ11:9）。

主は民に純粋なメッセージを伝えられると告げられている。

これにより全人類が「主の名を呼び求め、心を一つにして主に仕える」ことができるようになる。ゼパニヤ書3:9

また、その時、神の律法が人々の心に書き記されるとも告げられている（エレミヤ書31:33,34）。これは、アダムがエデンの園で神の律法に背いた時に失った完全さへ、人が回復される一つの方法を表している。

神の律法が人々の心に刻まれるには、神の助けが必要となる。その時、助けを必要とし、王国の規定の支配下に身を置く者たちを助けるために、奇跡を行う力が利用可能となる。

その時代について、人々は「正義を学ぶ」と告げられている（イザヤ26:9）。また主を知ることが学ぶ。主を正しく知ることが永遠の命である。

（ヨハネ17:3）。その間、サタンは縛られ、あらゆる

る悪の影響は抑えられる（黙示録20:1,2）。命への道は極めて明瞭に示され、「道行く者、たとえ愚かな者でも、その道に迷うことはない」と約束されている（イザヤ35:8,9）。

これは、クリスチャンが今直面している状況とはなんと異なることでしょう。クリスチャンは「狭い道」を歩んでいます。この道は見つけるのが難しく、見つけて歩む者は、その道のほぼ一步ごとに誘惑と試練に遭います。

（マタイ7:13,14）。もちろん神は彼らを助け、その報いは非常に大きい。しかし復元の「大通り」が開かれる時、この時代の試練は終わり、人類は必要なあらゆる助けを与えられ、速やかに完全に、地上の完全さと永遠の命へと戻る事ができるようになる。

これが、明日の世界に対する神の計画である。長い準備の年月は今やほぼ完了しつつある。明日の神の世界における王「ミカエル」は既に立ち上がり、彼の花嫁を迎え、諸国民に対する王権を掌握するために戻って来ることは、「国が生まれて以来、かつてないほどの苦難の時」をもたらしている。

（ダニエル書12:1）。この苦難は痛ましいものだが、世界が新たな王を受け入れる準備を整えている。彼の存在はまだ認識も承認もされていない。しかし、その栄光が現れる時、「すべての肉なる者は共にそれを見る」であろう。イザヤ書40:5

## 神の計画

エルサレムから「その支配と平和の増し加わる」は次第に広がり、やがてすべての国々を包み込み、彼らに喜びと平和と永遠の命をもたらす。

(イザヤ9:6,7) 地上の諸国が今日以上に深く謙遜した時、彼らは言うであろう。「さあ、主の山に登り、ヤコブの神の家に参ろう。主は御自身の道を教え、私たちはその道に歩むのだ」と。

こうして主の道を教えられる時、彼らは「剣を鋤に、槍を鎌に変える。国は国に対して剣を振るわず、もはや戦いを学ぶこともない」であろう。ミカ書4:1-4；イザヤ書2:2-4

そう、神には計画があり、それは時代を超えて着実に完成へと進んできた。

今、私たちは「満ちる時の御業」の門戸に立っている。そこでは神の計画の壮大なフィナーレが、すべての国々に平和と幸福と永遠の命の祝福をもたらすために実現される。この神の計画のフィナーレこそが、クリスチャンの祈り「御国が来ますように。御心が天で行われるように、地でも行われますように」に対する神の答えとなる。マタイ6:10

もし私たちが神の計画と、それが苦悩する世界にまもなくもたらす意味を知っているなら、それを他者に伝える特権が私たちにはあります。それが福音の真のメッセージであり、キリストの贖いの業を中心とする「良き知らせ」なのです。

機会あるごとに人々に伝えよう。神の計画はどこにおいても失敗したことはなく、御旨に従って栄光あ

る完結へと進んでいると。昨日の世界における御業は失敗しなかった。今日の世界における御業も失敗していない。明日の世界における御業も失敗することはない。イザヤ書42:4; 55:10,11; 53:10

神の計画はまもなく明日の世界で完成するゆえ、全地はまもなく楽園となり、エデンで失われイエスの死によって贖われたすべてのものが人々に回復される。こうして神はすべての顔から涙をぬぐい去り、死は勝利に飲み込まれる。黙示録21:1-5;  
1コリント15:54